

《研究ノート》

『四言語対訳小辞典』（1705）における ラトヴィア語名詞句形式の対訳例

田 中 研 治

要 約

標記の『四言語対訳小辞典』（1705）では、一部のドイツ語名詞の意味内容と厳密に一対一で対応するラトヴィア語名詞が当時は乏しかったため、既存の常用ラトヴィア語を工夫して組み合わせた説明的な名詞句形式が30以上記載されている。これらの名詞句形式による対訳例と、その言語的特徴を調査する。

1. 調査の目的

18世紀初頭に編纂された『四言語対訳小辞典』（1705）（以下、『小辞典』と略称する）に関しては、筆者の研究ノート（田中：2003）において既に概略的な解説を行ったので、以下においては重複的説明をなるべく避けるようにしたい。

この『小辞典』の著者と推測されているのが当時リガの町で牧師の職にあたりボリウス・デプキン（Liborius Depkin、1652-1708）であり、『小辞典』が彼の遺作ともいわれている。《ドイツ語－スウェーデン語－ポーランド語－ラトヴィア語》の四言語対訳形式になっているこの『小辞典』は、極めて小規模な語彙集ながら、当時日常的に使用されていたと思われるラトヴィア語の収録語彙、およびその収録方法に関してはいくつかの特徴的側面が観察される。

*2006年1月12日受理。

この『小辞典』では、各ページとも見開きの左ページ (verso) にはドイツ語、スウェーデン語が収録され、右ページ (recto) にはそれらの両言語に対応するポーランド語とラトヴィア語が収録されている。末尾の追加部分を除き、『小辞典』本体部分における収録語彙のすべてが名詞で、ドイツ語の全語彙には定冠詞が添えられている。またそれに対応するほとんどすべてのラトヴィア語には各々性別を示す指示詞が添えられている。

即ち、ラトヴィア語の指示詞はかつて冠詞的な機能を果たしていたこともあったため、*those* に相当する *Tahs* (=現代語 *tās*、女性・複数・主格)、*Tee* (=現代語 *tie*、男性・複数・主格)、そして *that* に相当する *Tas* (=現代語 *tas*、男性・単数・主格)、*Ta* (=現代語 *tā*、女性・単数・主格) が添えられている。

収録語彙に関する特徴の一つと考えられるのが、ラトヴィア語の見出し語の記載方法である。即ち、ドイツ語、スウェーデン語、ポーランド語の三言語の見出し語としては、原則として単一の名詞が収録されているが、一方、三言語に対応するラトヴィア語の見出し語においては多くの箇所、単一の名詞を示さず、説明的な名詞句形式が記載されている。

今回の調査の対象は、上で述べた「説明的な名詞句形式」として収録されたラトヴィア語である。そして、対訳の原語であるドイツ語名詞と比較しながら、当時常用されていたと思われるラトヴィア語名詞句の形態と意味内容を検討することが目的である。

2. 『小辞典』の原典と他の参照辞典

前稿 (田中：2003) でも述べたように、この『小辞典』では、収録語彙の配列方法として、アルファベット順ではなく、24の意味分野に準拠した配列になっている。以下においては、いくつかの意味分野に見られるドイツ語 (高地

ドイツ語。17世紀までに、低地ドイツ語地域の都市部がほとんど高地ドイツ語を公的言語として採用していたという事情によるとと思われる）と、それに対応するラトヴィア語の「説明的な名詞句形式」を列挙して、適宜解説を加える。

今回使用するテキストは、前回同様、ペーテリス・ヴァナクス（Pēteris Vanags）編集による原典のファクシミリ版（1999）である。『小辞典』で使用されている文字形態は、ドイツ語、スウェーデン語、ラトヴィア語がゴシック字体であり、ポーランド語だけがラテン字体である。以下において引用するドイツ語、ラトヴィア語はすべてラテン字体に変換して示すが、特にラトヴィア語の表記は、印刷上の便宜を考え、ファクシミリ版の語彙索引中に使用されている現代的表記を採用する。なお、「説明的な名詞句形式」は、Vanags のファクシミリ版における解説中（p.78）で言及されている諸形式を参考にして原典中から選び出したものである。

今回この『小辞典』の語彙調査を行うにあたり、その1705年という年代の約70年前に出版された Mancelius の2種類の語彙集（*Lettus; Phraseologia Lettica*, 1638）と、約80年後に出版された Stender の *Lettisches Lexikon* 『ラトヴィア語辞典』（1789）とを出来る限り参照して、1705年という特定時期に記録された語彙や表現が、時間的連続性の中で、形態的にまた意味的に、どのような変化の過程や結果を示すか、ということにも注目してみたい。なお、項目によっては、19世紀後半に出版された Ulmann の *Lettisches Wörterbuch*（Erster Theil, Lettisch-deutsch Wörterbuch）『ラトヴィア語ードイツ語辞典』（1872）にも言及することがある。

Mancelius、Stender、Ulmann の辞典中から語句を引用するときは各辞典の表記に原則として従う。また、Mancelius の語彙集は、T. G. Fennell による編集テキスト（原典の見出し語をアルファベット順に並べ換えたテキスト）を使用する。

以下においては、《 》で示される意味分野ごとに該当する語句を列挙す

る。現代語に相当する語彙については、調べ得た範囲で記す。

3. 《身体とその部位》

(1) Der Nagel (爪) / *Tas Nags pie Ruoku*

ドイツ語 Nagel には「釘」と「爪」の意味があるため、「釘」と混同しないようにしたためであろうか。ラトヴィア語の意味は「手の爪」である。なお、この『小辞典』の「手工業と職人」関連語彙には、中期低地ドイツ語 Nagel から借用されたラトヴィア語 *nagle* 「釘」が収録されている。現代ラトヴィア語で「爪」は *nags* である。Mancelius (*Lettus*) では、*naggs* の項で、Finger=Nagel, Huff oder Solen an Pferden, Klaw der Vogel und Thiere など複数の対応するドイツ語表現が見られるが、*Nags pie Ruoku* という表現自体は記載されていない。Stender の辞典（ドイツ語ーラトヴィア語の部分。以下、「独ーラ」と略称）では、Nagel (釘) を (eisen) *nagla* とし、Nagel (爪) を (an Hand oder Fuss) *nags* とし、見出し語を分けている。

4. 《教会と教会関係》

(1) Der Gottesdienst (礼拝) / *Tā Dieva Kalpuošana*

ラトヴィア語の意味は「神の礼拝」で、ドイツ語複合名詞の意味に準拠した形でラトヴィア語に置き換えられている。現代語では *dievkalpojums* である。Mancelius (*Lettus*)、Stender (「独ーラ」、p.295)、および Ulmann にも上と同じ語句がみられる。ドイツ語からの翻訳借用 (loan translation) と考えられる語句である。

(2) Die Bibel (聖書) / *Dieva Svētais Raksts*

ラトヴィア語の意味は「神の聖なる書物」であるが、この語句には指示詞が

ついていない。現代語では *bībele* であるが、当時はまだこの名詞が一般化していなかったのであろうか。Stender (「独ーラ」、p.140) には、次の記述がある (和訳は筆者による)。

Bibel, bihbele, ta sweta grahmata (聖なる書物), *tee swehti raksti* (聖なる書物), *Deewa swehti wahrdi* (神の聖なる言葉)。

また、Mancelius (*Lettus*) にも *bībele* の項目はなく、*grāmata* (書物) の項目には、*Deewa=Ghramata Bibel* が記載されているだけである。

Karulis の『ラトヴィア語語源辞典』(第1巻、1992) によれば、*bībele* はドイツ語からの借用語 (*aizguvums*) となっている。Karulis の同書 (p.124) によれば、過去においてラトヴィアで出版された聖書の翻訳を調べると、表題に関して次のような変遷があることが指摘されている。

1. 1685から1694年の間に出たラトヴィア語の翻訳では、表題は《*Svēto grāmatu*》となっている。
2. 1739年の版ではラテン語の《*biblia*》が使用されている。
3. 1794年の版では《*bībele*》が使用されている。

Karulis の指摘から推測されることは、この『小辞典』が編纂された時代(1705年)には、上にも述べたとおり、まだ *bībele* という借用語が (少なくとも一般大衆には) 広く普及してはいなかったと考えられる。正確な年代はわからないが、その後18世紀半ばぐらいから徐々に使用されるようになったと推測される。従って、上記 Stender 辞典中の *bihbele* は、初期の借用語から現代語の語形に移る直前の過渡期的な形といえるかもしれない。

Ulmann をみると、*bihbele, -es, die Bibel*. という記述があり、この語が19世紀後半には、その複数形とともに既に一般化していたことが窺える。

(3) Der Priester (牧師) / *Tas Baznīcas Kungs*

ラトヴィア語の意味は「教会の主人(男性)」。

現代ラトヴィア語で、「牧師」は *mācītājs, priesteris* である。Stender には次の記述がある (「独ーラ」、

p.462) が、*preesteris* は語形から判断してドイツ語からの借用語であるらしいことは容易に想像がつく。

Priester, Opferpriester, *preesteris*,

Pastor, *mahzitajs*, *baznizkungs*.

Mancelius (*Lettus*) にも既に *Basnizas = kunx* Priester が記載されている。

Karulis (1992) によれば、現代語の *priesteris* は中期低地ドイツ語 *prēster*、または中期オランダ語 *preester* からの借用だと説明している。Schwers (1953, p.95) は、中期低地ドイツ語 *prēster* の借用語形とみている。

5. 《尊称のための添え名》

(1) Der Fürst (領主、君主) / *Tas Liels Kungs*

ラトヴィア語の意味は「偉大な主人(男性)」。現代語では *firsts*、または *lielskungs*。Mancelius (*Lettus*) にも既に *Leelskungs ein Früst; oberster Herr* が記載されている。Stender (「独ーラ」、p.258) にも『小辞典』と同じ語句の対応がみられる。Ulmann によれば、この *Leelskungs* は、かつてクールランド(現在のクルゼメ)地方における「公爵」(*der Herzog*) の意味をもっていたことが記されている (p.127)。

(2) Der Freyherr (男爵) / *Tas Brīvu Kungs*

ラトヴィア語の意味は「自由な主人(男性)」。現代語では *brīvkungs*, *barons* である。ドイツ語の意味をラトヴィア語に翻訳借用した表現。Mancelius には記載がないが、Stender (「ラー独」、p.29) には、*brihweskungs*, *Freyherr* が記載されている。

(3) Der Raht (市会議員) / *Tie Runnas = Kungi*

ラトヴィア語の意味は「協議をする男性たち」。現代語では *padomnieks*。Stender (「独ーラ」、p.469) には、次の対応がみられる。

Rath, Senat, *Rahtkungi*.

なお、Stender は同じ469ページにおいて、Rathsherr の対訳に *runnas kungs* を記している。また、Mancelius (*Lettus; Phr. Let.*) にも *runnas = kungs Rahtsherr* が既に記載されている。

(4) Das Rahthaus (市庁舎) / *Tas Runnas Nams*

現代語では *rätsnams*。ラトヴィア語の意味は「協議のための建物」。Stender (「独ーラ」、p.469) においては、Rathhaus の対応語として、*rahtsnams* を記している。一方、Mancelius および Ulmann の辞典には関連する語句は記載されていない。

(5) Die Gottlosigkeit (無神、無信仰) / *Tā Dieva Apsmiešana*

現代語では *bezdievība*。ラトヴィア語の意味は「神を蔑むこと」。Stender (「独ーラ」、p.296) においては、現代語の原型である *besdeewiba* を記している。Ulmann の辞典でも同じである。この項目は、今回取り上げた32個の語句の中では最も抽象的な意味をもつ。

6. 《男女別と血縁関係》

(1) Der Brautschatz (嫁資) / *Tās Brūtes Mantas*

ラトヴィア語の意味は「花嫁の資産」。現代語では *pūrs* が用いられる。*Bruhtes* は現代語 *brūte* (花嫁) の原型で、この語は直接的には中期低地ドイツ語 *brūt*、あるいは中期オランダ語 *bruut* からの借用語である。一方、*mantas* は Schatz (財宝) に対応する翻訳借用にあたる。Ulmann の辞典には *puhrs* (= die Aussteuer) が記載されているが、Mancelius、Stender の辞典には記載がない。

(2) Die Bademutter (助産婦、産婆) / *Tā Saņēmēja Sieva*

ラトヴィア語の意味は「分娩させる女性」であるが、ドイツ語の複合名詞の

構成とは意味的に一致していない。現代語では *vecmāte*。原典では、*Tā Saņ-ēmēja Sieva* の後に *Bahdmohdere* という語形が記してあるが、これは中期低地ドイツ語 *bādemöder* (助産婦) からの借用である (Schwers [1953], p. 9)。

Stender (「独ーラ」、p. 101) では、*Badmutter, wezza (=veca) mahte (=māte), sanehmeja mahte, (bahdmohdere.)* と記しているが、既にここには現代語の *vecmāte* に近い語形が現れている。

7. 《学校》

(1) Das Gebeth (祈祷) / *Tā Dieva Lūgšana*

ラトヴィア語の意味は「神の祈り」。現代語は *lūgšana*。Mancelius (*Lettus*) では、*luhkuschana bitt, Gebet* が記載されている。Stender の辞典では、ドイツ語 *Gebet* に対して、*swehta luhgsana, Deewa luhgsana.* が記載されている。Ulmann の辞典には単独の見出し語として、*luhgsana* の記載があり、*die Bitte, das Gebet* に対応させ、「より詳しくは、*Deewa luhgsana* である」という説明を補足している。

(2) Der Lehrstuhl (先生の椅子) / *Tas Spredika = Krēsliis*

ラトヴィア語の意味は「講義用椅子」。現代語では *katedra*。ラトヴィア語のもう一方の意味として、「(教会の) 説教壇」(現代語では *kancele*) があったが、それはドイツ語 *die Kanzel* に対応していた(『小辞典』、p. 15)。当時は、従ってドイツ語 *Lehrstuhl* には、上の2つのラトヴィア語の意味が対応していたと考えられる。なお、Mancelius (*Lettus*) には、*Spredika = Krēsliis* の古い形 *Predigka = krähslis Cantzel* だけが記載されている。

(3) Der Schüler (生徒) / *Tas Skuoles = Puišis*

ラトヴィア語の意味は「学校の子供」。現代語では *skolnieks*。 *skuoles* (現代語 *skola* [学校]) は中期低地ドイツ語 *schöle* からの借用語である。なお Man-

celius の *Lettus* にだけ *skola* が記載されている。Stender にも記載がある（「独ーラ」、p.270）。

(4) **Der Mitschüler（同級生）／*Tas Skuoles = Biedris***

ラトヴィア語の意味は「学校の仲間」。現代語は *skolas biedrs*。Stender（「独ーラ」、p.415）にも同一の対応がみられるが、Mancelius には関連語句は記載されていない。

(5) **Das Pargament（羊皮紙）／*Rakstāma Āda***

ラトヴィア語の意味は「書かれるための皮」だが、指示詞が欠けている。現代語では *pergaments*。Mancelius、Stender には記載がない。Ulmann では *ahda* (= *āda*) の項目に、同一の対応が記載されているが、「(羊皮紙は) あまり使われない」という補足説明がある。

(6) **Das Federmesserlein（ペンナイフ）／*Tas Nazis pēc Spalvām***

ラトヴィア語の意味は「羽（ペン）用のナイフ」。現代語では *spalvu nazis*。Mancelius、Stender、Ulmann にはいずれも記載がない。

8. 《商人》

(1) **Das Lack（封蝋）／*Aizspiesamais Vaskis***

ラトヴィア語の意味は「押しつけられるための蝋」だが指示詞が欠けている。現代語は *zīmoglaka*。Mancelius、Stender、Ulmann にはいずれも記載がない。

(2) **Der Pitschirring（指輪印章）／*Aizspiesamais Gredzens***

ラトヴィア語の意味は「(印が) 押されるための指輪」だが指示詞が欠けている。現代語では *zīmoggredzens*。Mancelius、Ulmann には記載なしであるが、Stender（「独ーラ」、p.458）には同一の対応が記載されている。

9. 《薬局と病気》

(1) Das Träncklein (飲み物) / *Dzerama Lieta pēc Neveselibām*

ドイツ語では単に「飲み物」。ラトヴィア語の意味は「病気のために飲まれるもの」だが指示詞が欠けている。現代語では、説明調に *zāļu šķīdums* (薬の溶液)。Mancelius、Stender、Ulmann にはいずれも記載がない。

(2) Der Safft ([植物などの] 汁液) / *Vārīta Lieta pēc Neveselibām*

ラトヴィア語の意味は「病気のために煎じられるもの」だが、ここでも指示詞が欠けている。現代語では、やはり説明調に *zāļu novārījums* (薬を煎じたもの) となる。Mancelius、Stender、Ulmann にはいずれも記載がない。

10. 《手工業と職人》

(1) Die Scherbe (破片) / *Puodu Gabals*

Puodu の原形は *puods* で、18世紀以前から *puods* には様々な意味が対応していたと思われる。何故ならば、例えば Mancelius (*Lettus*) には「深い鍋、壁タイル、陶器」などの意味が記載されているからである。従って、上のラトヴィア語の意味は「鍋、陶器、タイルなどの破片」となるはずである。ただし指示詞が欠けている。現代語では *lauska*。Mancelius (*Lettus*) には、類似の語句 *ghabbals no sadausietu Pohdu Scherb* が記載されている。Stender においては、Scherbe の項目 (「独ーラ」、p.504) には *schuķķe* という語が記されているが意味不明。

(2) Das Scheermesser (髭剃り用剃刀) / *Brādu Dzenamais Nazis*

ラトヴィア語の意味は「髭が剃られる剃刀」。現代語では *bārdas nazis*。Mancelius には記載されていないが、Stender (「ラー独」、p.13) には *bahrda nazis*, Barbier = oder = Scheermesser. の記載がある。Ulmann には同じ語句 *bahr-*

das nazis, *das Rasirmesser*.の記載がみられるが、「めったに *skuumais* (剃られる)は使われない」という補足説明がある。即ち、Ulmann の時代には、*bahr-das skuumais nazis* という語形の代わりに、Stender が記載している単純化された *bahrdas nazis* が確立していたようである。この場合も指示詞が欠けている。

(3) **Das Laß-Eisen (瀉血用の [鉄の] 道具) / *Asinu Laisama Dzelze***

ラトヴィア語もドイツ語の語順に沿った翻訳借用に基づく意味で、「血が抜かれる鉄 (の道具)」。Mancelius (*Lettus*) には *Laischana = dsellse* Laßeeysen の語形が記載されている。Stender にも *Aderlaßeisen, assins laischama dzelze* (「ラー独」、p.27) の記載がある。ここでも指示詞が欠けている。上の「髭剃り用剃刀」と同様、この瀉血用道具も当時の床屋 (外科的な治療行為も行っていたといわれる) が使用していたものであろう。

(4) **Das Schnitzmesser (切断用刃物) / *Garkāta Nazis. ar abijam Ruokām Velkamais Nazis***

Garkāta Nazis の部分は「長い柄のついた刃物」の意味で、*ar* 以下は「両手で引っ張られる刃物」の意味。この語句は『小辞典』の46ページに記載されているが、同ページにおけるその直前の語は *Der Böttcher* (桶職人) であり、その直後の見出し語は *Der Reiff* ([桶、樽の] 箍) と *Das Faß* (樽) であることから考えると、この刃物は「桶 (樽) 造り」に関連する刃物であろう。Mancelius、Stender、Ulmann にはいずれも記載がない。ここでも指示詞が欠けている。

(5) **Der Schübkarren ([一輪の] 手押し車) / *Tas Dzenamais Ratiņš***

ラトヴィア語の意味は「(物が)運ばれる車」。現代語では *kerra* (英語の *wheelbarrow*)。Stender (「ラー独」、p.218) には同形の語句が記載されている。Mancelius、Ulmann にはいずれも記載がない。

11. 《家屋と家庭用品》

(1) Der Deckel (蓋) / *Tas Puodu = Uzgāzmais*

ラトヴィア語の意味は「鍋の上に重ねる (= 載せる) もの」であろう。*Puodu* の意味については、既に Die Sherbe の項目で説明済み。現代語では *vāks*。Stender (「独ーラ」、p.175) では、*wahks*, *usleekamais* (多分「載せる物」の意), *usgahschamajs*, *apklahjamajs* (「覆う物」の意) の4語を対応させている。Mancelius には記載なしだが、Ulmann では Stender と同様、*wahks* が記載されている。

(2) Das Handfaß (手洗い用の器) / *Tas Ruoku Mazgajams Beķenis*

ラトヴィア語の意味は「手が洗われる器」。現代語では *bloda*。Mancelius、Ulmann にはいずれも記載がないが、Stender (「独ーラ」p.309) には、Handfaß に対して *rohku beķenis* の語形が記載されている。

(3) Die Gießkanne (如露) / *Tā Leijama Kanna*

ラトヴィア語の意味は「(水が) 撒かれる容器」。Kanna が使用されているのは、当時既にこの語が中期低地ドイツ語 *kanne* からの借用語として既にラトヴィア語中に定着していたからではないかと思われる。現代語では *lej-kanna*。Mancelius、Ulmann には記載がない。同一の語形ではないが、Stender (「独ーラ」、p.289) には、Gießfaß oder Kanne, *laistischanas* oder *laistijams trauks*. の記載がある (意味は「水を撒くための容器」)。

(4) Der Teppich (絨毯) / *Raibais Galda Deķķis*

ラトヴィア語の意味は「多彩な色のテーブル用毛布 (テーブルクロス?)」。

現代語では *galdauts*。現代ドイツ語 Teppich の中心的な意味は「絨毯」であるが、この場合はラトヴィア語の名詞句から判断すると、当時のドイツ語では「毛布」の意味だったかもしれない。確かに現代ドイツ語 Teppich には「南部ドイツ、スイス」の方言として「毛布 Wolledecke」の意味が辞書に記載さ

れている。Stender (「独ーラ」、p.582) では *Teppich, raibs deķķis*, という語句が記載されている。同じく Stender (「ラー独」、p.40) には、*deķķis, Decke*, (grüne Weiberdecke [緑の女性用毛布]) という語がある。Mancelius (*Lettus*) には *deķis* *Decke* の対応がみられる。なお、*deķķis* は中期低地ドイツ語 *decke* からの借用語とみなされている (Sehwers [1953, p.26] は *deķis* という語形をあげている)。上の *kanna* の場合と同様、*deķķis* も借用語でありながら既に当時はラトヴィア語中に定着していた語であろう。この場合も指示詞が欠けている。

12. 《金属と鉱物》

(1) Das Metall (金属) / *Tās Apakš zemes izlauztas Varu = Lietas*

ラトヴィア語の意味は「地下で掘られた銅のようなもの」。現代語では *metāls*。Mancelius (*Lettus*) では、*Warrsch* が複数の意味 (「鉱石」、「銅」、「金属」) を伴って記載されているが、当時この語はかなり広い意味範囲をもっていたのであろう。その一部が現代語では *varš* に継承され、意味は「銅」に限定されている。Stender (「ラー独」、p.347) でも、*warsch* は Mancelius と同様、「鉱石 (Erz)」、「金属 (Metall)」、「銅 (Kupfer)」の意味が与えられている。

(2) Der Magnet (磁石) / *Tas Dzelzu velkamais Akmins*

ラトヴィア語の意味は「鉄が引きつけられる石」。現代語は *magnēts*。Stender (「独ーラ」、p.402) においては、上と同様の語句が記載されている。Mancelius にも Ulmann にも記載なし。

13. おわりに

以上で32語のドイツ語に対応するラトヴィア語の「説明的な名詞句形式」を取り上げ、調べ得た範囲で意味と語形に関する特徴の解説を試みた。

全体を通じてわかることは、18世紀初頭という時代的な背景からすると、当時のラトヴィアではこれらのドイツ語が比較的新しい語（従って、被指示物である事物自体も比較的新しいもの）であり、その意味内容が多くのラトヴィア人には広く知られていなかった（あるいは全く未知の概念だった）ために、特定の既存のラトヴィア語単語で厳密に対応させることが困難であったらしいことである。

そのため、『小辞典』の編者は、特定語彙の意味内容の明確化を意図して、様々な工夫を凝らしたラトヴィア語表現を使用していることが窺われる。32個の例をみると、編者はほとんどドイツ語からの借用語形を使わず、なんとか生粋のラトヴィア語で表現しようとしていたらしい。精緻な対訳や詳細な説明はもともと編者の念頭になく、当時新たに導入された事物（や概念）をラトヴィア語でいかに名付けるかという、極めて日常的な言語使用のレベルでの説明的対訳が試みられた結果といえるのではないだろうか。

まず、本文中においても言及したように、「翻訳借用」の形式がある。これは新たな概念をある言語からある別な言語へと導入する場合によく用いられる新語創造の常套的手段であるが、上の32個の「説明的な名詞句形式」の中においてもいくつかの場合に認められる。

以下、それらの（直訳的）意味とともに語句の例をあげ、各意味分野の番号（3.～12.）、および該当する項目番号を添える。スラッシュの前が対訳の基軸となるドイツ語単語である。

例：Der Gottesdienst／*Tā Dieva Kalpuošana*（4.－(1)、神の礼拝）、Der Freyherr／*Tas Brīvu Kungs*（5.－(2)、男爵）、Das Rahthaus／*Tas Runnas Nams*

(5.-(4)、協議のための建物)、*Die Gottlosigkeit/Tā Dieva Apsmiesāna* (5.-(5)、神を蔑むこと) など。

また、部分的な翻訳借用を含む対訳語句もみられる。例えば、*Der Brautschatz/Tās Brūtes Mantas* (6.-(1)) の場合、*Brūtes* はドイツ語からの借用語で、後半の *Mantas* は生粋のラトヴィア語であり、*Die Gießkanne/Tā Leijama Kanna* (11.-(3)) では、*Kanna* がドイツ語からの借用語で、*Leijama* がドイツ語原語 *gießen* (水を注ぐ) に相当するラトヴィア語である。

次に、ある事物を「特定化」するための限定的な語句を使用し、その事物の意味を絞り込んで、概念上の正確な対応を意図していると思われる項目もいくつかみられる。

例えば、*Der Nagel/Tas Nags pie Ruoku* (3.-(1)、手の爪) の場合は、「手の」(*pie Ruoku*) という特定部分を明示し、*Nags* の意味を限定している。また *Der Priester/Tas Baznīcas Kungs* (4.-(3)、教会の主人) の場合は *Baznīcas* という特定場所を明示することによって *Kungs* の意味を限定している。*Der Schuler/Tas Skuoles = Puisis* (7.-(3)、学校の子供)、*Der Mitschüler/Tas Skuoles = Biedris* (7.-(4)、学校の仲間) の場合も同じである。

一方、*Der Raht/Tie Runnas = Kungi* (5.-(3)、協議する男性たち)、*Die Bademutter/Tā Saņēmēja Sieva* (6.-(2)、分娩させる女性) の場合は、ある人に関する「特定の職能」が限定的に明示されている例である。

典型的な事物を一例として示し、それに「～のようなもの」という語 *Leetas* (現代語 [複数形] は *lietas*) を添えている場合が1例ある。即ち、*Das Metall/Tās Apakš zemes izlauztas Varu = Lietas* (12.-(1)、地下で掘られた銅などのようなもの) の場合である。

さらに、典型的な性質、属性を「特定化」の形容要素として表現している例もある。例えば、*Die Bibel/Dieva Svētais Raksts* (4.-(2)、神の神聖なる書物)、*Das Gebeth/Tā Dieva Lūgšana* (7.-(1)、神の祈り)、*Der Magnet/Tas*

Dzelzu velkamais Akmins (12. -(2)、鉄が引きつけられる石)の場合である。

10. -(4)の項目 *Das Schnitzmesser / Garkāta Nazis. ar abijam Ruokām velkamais Nazis* (長い柄のついた刃物。両手で引っ張られる刃物) は事物の典型的な「形状」に加えて、後半部ではその「使用法」が特定化の要素になっている例と考えられる。

「特定化」を意図する表現要素として、ある事物に関する典型的な「特定用途と目的」を示す語句が明示された例が、以下のように最も多く観察される。いずれも、ある事物の日常的、実地的な使用方法などに言及した名詞句形式であることがわかる。

Der Lehrstuhl / Tas Spredika = Krēslis (7. -(2)、講義用椅子)

Das Pargament / Rakstāma Āda (7. -(5)、書かれるための皮)

Das Federmesserlein / Tas Nazis pēc Spalvām (7. -(6)、羽 [ペン] 用ナイフ)

Das Lack / Aizspiesamais Vaskis (8. -(1)、押しつけられるための蠟)

Der Pitschirring / Aizspiesamais Gredzens (8. -(2)、[印が] 押されるための指輪)

Das Träncklein / Dzerama Lieta pēc Neveselibām (9. -(1)、病気のために飲まれるもの)

Der Safft / Vārīta Lieta pēc Neveselibām (9. -(2)、病気のために煎じられるもの)

Das Scheermesser / Bārdū Dzenamais Nazis (10. -(2)、髭が剃られる剃刀)

Das Laß-Eisen / Asinu Laisama Dzelze (10. -(3)、血が抜かれる鉄[の道具])

Der Schübkarren / Tas Dzenamais Ratiņš (10. -(5)、[物が] 運ばれる車)

Der Deckel / Tas Puodu = Uzgāžamais (11. -(1)、鍋の上に重ねる物)

Das Handfaß / Tas Ruoku Mazgajams Beķenis (11. -(2)、手が洗われる器)

Die Gießkanne / Tā Leijama Kanna (11. -(3)、水が撒かれる容器)

Der Teppich/*Raibais Galda Dekķis* (11. –(4)、テーブル用毛布)

参考文献

I. 原典 (ファクシミリ版)

Vanags, P. (ed.) 1999. *Wörter = Būchlein / Wie Etzliche gebräuchliche Sachen auff Teutsch / Schwedisch / Polnisch und Lettisch / Zu benennen seynd.* (Facsimile edition.) Stockholm: Memento.

(注：上記タイトル中の文字 f は s で置き換えた)

II. その他

Fennell, T. G. 1988. *A Latvian-German Revision of G. Mancelius' Lettus (1638)*. Melbourne: Latvian Tertiary Committee.

Fennell, T. G. 1989. *A Latvian-German Revision of G. Mancelius' Phraseologia Lettica (1638)*. Melbourne: Latvian Tertiary Committee.

Karulis, K. 1992. *Latviešu Etimoloģijas Vārdinca*. (vol. I & II) Rīga: Avots.

Sehwers, J. 1953. *Sprachlich-kulturhistorische Untersuchungen vornehmlich über den deutschen Einfluß im Lettischen*. 2. Aufl. Berlin: Erich Blaschker.

Stender, G. F. 1789. *Lettisches Lexikon in zween Theilen*. Mitau: J. F. Steffenhagen.

Ulmann, C. C. 1872. *Lettisches Wörterbuch*. (Erster Theil. Lettisch-Deutsch Wörterbuch.) Rīga : H. Brutzer.

田中研治 2003.『『四言語対訳小辞典』(1705)におけるラトヴィア語名詞の性別—ドイツ語借用語の場合—』『神戸薬科大学研究論集 *Libra*』4、67-81.

Summary

A Note on the Latvian Noun-Phrase Entries in *Wörter=Büchlein* (1705)

Kenji TANAKA

(Kobe Pharmaceutical University)

This note aims at explaining the linguistic characteristics observed in some thirty Latvian noun-phrase entries corresponding to German nouns recorded in the small lexicon named *Wörter=Büchlein* (1705). Those entries are mainly adopted in the cases of German nouns which lack genuine single Latvian counterparts. The entries, therefore, contain combinations of ordinary Latvian words then used and are explanatory in nature.